成田のむかし⑭

このコーナーでは長年、市内の小中学校で教職にあった蛭田光城さんが市立図書館発行（平成元年）の「成田のむかし」に執筆した成田の昔の暮らしの様子を掲載していきます。

高瀬舟が通っていたころの利根川

洪水

文　蛭田光城（ひるたみつき）
絵　野上和彦

「利根川は大きいんだね。」

「うん、大きいね。川の長さでは、信濃川に次いで2番目だよ。でも流域の面積では日本一さ。昔から坂東太郎利根川、筑紫次郎筑後川、四国三郎吉野川といわれて、有益な河川とされていたんだよ。電車や自動車のなかった昔は、高瀬舟が大きな白い帆を上げて、通っていたんだ。東京へは米・雑穀・野菜・まき・木材などを、東京からは塩・砂糖・日用雑貨などを運んできたんだ。大正のころまでは、ポンポン蒸気も通っていたんだ。利根運河があって、東京との交通路だったんだね。」

「利根川があって、よかったね。」

「いいことだけとは限らないさ。流域面積が広いということは、広く開けた平野を流れていることだね。だから川の上下の高低が少ない。従って流れが悪い。だから水がとどこおって、大雨の時は洪水が起こるということだよね。」

「洪水がそんなにあったの。」

「うん、今まで、大小の洪水が、何十回となくあったんだ。八十年前の明治43年、利根の四大洪水といわれる大水が出て、家も田畑も押し流されてしまったんだよ。」

「そんなとき、みんなはどうしたの。」

「これはおばあさんに聞いた話だけどね、利根川の水がだんだん増えて、土手が危なくなると、鐘が鳴る。ほら貝が吹かれる。男の人は土俵が流されないよう張り付ける竹を用意したりする。夜になると、土手の上にはかがり火と、ちょうちんでいっぱいになる。向こう岸から、いつ土手を崩しにくるかわからないので、大勢の人が、みの笠姿で、昼も夜も番をしていたというんだ。女の人は炊き出しをして忙しく、その間をぬって、いざというとき持ち出す荷物をまとめておく。寝るどころではなかったそうだ。」

編集後記

健康保険では、多くの場合医療費の３割を支払いますが、今、その運営が大変厳しくなっています。医療の進歩で、今まで治療できなかった病気が治療できるようになり、医療費がかさんでいる現実もあります。早期発見で医療費を抑制することはもちろんのことですが、予防に心掛け病気にならないことが一番。私もメタボ、生活習慣病予備軍。運動しないと…。

JAB EMS Accreditation RE001　KHK ISO 14001 06ER・586

成田市役所本庁舎（行政棟、議会棟、消防本部、成田消防署）はISO14001の認証登録を受けています。

平成20年8月15日号 No.1129　成田市のホームページ http://www.city.narita.chiba.jp

昭和13年7月の根木名川のはんらん（成田市長沼）

平成20年8月15日号／月2回　1日・15日発行／編集発行：成田市役所企画政策部広報課　〒286-8585 花崎町760番地　電話22-1111（大代表）
広報なりたは再生紙を使用しています。